

論客

森岡 正作

鬼やらひ

山国にスーパーひとつ海鼠買ふ
雪原に一点の吾黒尽め
裸木の隆々たるを拝しけり
埋火ややまとことのは慈しむ
神頼みばかりしてゐる懐手
論客の河豚喰ふ暇もなかりけり
文芸の端くれにゐてふぐと汁

朝、今日は節分かと思いつつ何かもの憂い、豆撒きが億劫なのである。小学生くらいの孫でもおれば、喜んで撒く相手をするのであるが、自分が窓を開けて撒く姿を想像すると、「おお、隣りの親父が豆撒いているぞ」と言われかねない感じである。そんなことを気にする必要もなく、まして誰も見てはいないだろう。さて、夕方部屋にいと娘が入って来て窓を開けたものの、か細い声で部屋の中だけに二粒の豆を「鬼は外」と撒いて行った。おお、撒いてくれたかと安堵するとともに、俺は鬼かとも思った。

登四郎先生に「鬼やらひ終りは遠き闇へ打つ」という御句がある。その「遠き闇へ打つ」には、鬼を遠くまで追いやつたという思いと、闇の奥から明るい未来が再生してくるのを待つような感じにも思える。やはり日本古来の風習は大切なものである。